# 資本制的生産様式における「労働疎外」の考究（完）

水谷謙治

はしがき
第一章　初期「労働疎外」論の概観……以上第二十五巻第二号所載
第二章　資本制的生産様式における「労働の疎外」
序　節　『資本論』の諸草稿における「労働疎外」の規定
第一節　単純商品生産における「労働疎外」の端初的形態
〔Ⅰ〕　商品に関する基礎的考察
〔Ⅱ〕　単純商品生産における「労働疎外」の端初的形態……以上第二十五巻第四号所載
第二節　「労働疎外」の展開過程
〔Ⅰ〕　「労働疎外」の基本的前提条件――労働力の売買――
〔Ⅱ〕　労働過程と価値増殖過程に関する一般的考察
〔Ⅲ〕　「労働疎外」の展開（その一）……以上第二十六巻第一号所載
〔Ⅳ〕　「労働疎外」の展開（その二）……以上第二十六巻第二号所載
第三節　本章のまとめ
〔Ⅰ〕　「労働疎外」の揚棄
〔Ⅱ〕　共産主義社会とその過渡期における人間労働のありかた

〔Ⅲ〕「労働疎外」と労働者階級の「窮乏化」との関連……以上第二十六巻第三号所載
第三章　初期「労働疎外」論と『資本論』との関連
第一節　初期「労働疎外」論の諸論点について――第一章の要約と補足――
第二節　初期「労働疎外」論と『資本論』との関連に関する一見解の検討
第三節　結論――初期「労働疎外」論と『資本論』との関連――
あとがき……以上本号所載

# 第三章　初期「労働疎外」論と『資本論』との関係

## 第一節　初期「労働疎外」論の諸論点について――第一章の要約と補足――

### (一)

初期「労働疎外」論というとき、これを『経済学・哲学草稿』（一八四四年）の一断片部分「〔疎外された労働〕」のみに限定してこの部分だけをあつかってすませる論者がみうけられる。しかし、この断片部分以外の諸草稿をはじめ、『経・哲草稿』とほぼ同時期に作成された「経済学抜粋ノート」[1]や、『草稿』直後、同じ年に執筆された『聖家族』にも、「労働疎外」に関する重要な論及がみられる。したがって、『草稿』の「〔疎外された労働〕」だけをこれらの論述から切り離してあつかうべきではない。したがってまた、本稿で初期「労働疎外」論を扱うさいには、「〔疎外された労働〕」の部分を中核としてとらえながらも当時の「労働疎外」に関する他の諸論述もその範囲にふくめてこれを行なうことにする（この点はすでに第一章でも簡単に指摘してある）。

（1）『経・哲草稿』と「経済学抜粋ノート」との時間的関連の考証については、『ドイツ哲学雑誌』一九六九年二月号所載のN・I・ラーピンの論文、「マルクスの『経済学・哲学草稿』における所得の三源泉の対比的分析」（細見英氏訳『思想』〈五六一号〉所載）がある。またこの論文の紹介と論評に、細見英氏の「『経哲草稿』第一草稿の執筆順序――N・I・ラーピン論文の紹介――」がある（「立命館経済学」第十九巻第三号所載）。

この考証は事実に裏付けられた手堅いものと考えられる。それによると『草稿』の各部分と各種の「ノート」との順序はつぎのようにいりくんだ順序で書かれている。最初に「経済学抜粋ノート」の第一、第二、第三ノート、ついで『経・哲草稿』の第一草稿、そのつぎに第四、第五ノート、つづいて第二、第三草稿という順序がこれである（細見氏からさきの「紹介」論文を送付していただき、右の事実や他の知識をえられた。ここに記して謝したい）。なお、両オリジナルのフォトコピーにもとづいて、右の考証を追試し補完したものとして、山中隆次氏の「『経済学・哲学草稿』と『抜粋ノート』の関係――ラーピン論文によせて――」（『思想』五六九号〈一九七一年十一月〉所載）がある。なおまた、この「抜粋ノート」からの引用は、第一章の場合と同様、杉原、重田訳、未来社刊『経済学ノート』によるものとする。

さて、初期「労働疎外」論についてはすでに第一章で概観した。ここではこの概観にもとづいて、当面する観点から再度その重要な諸点をぬきだし、これらについて多少の補足を加えておくことにしよう。

〔1〕、ヘーゲルにおける「疎外」概念は、さしあたり主体たる意識（精神）の運動で生みだされる対象が主体から自立化する過程――それは同時に、意識が右の対象を客体として認識し再びこれを自己のうちに奪回（止揚）する必然性をふくむ過程である――を表わす概念である。ヘーゲルの観念性を批判したフォイエルバッハの「疎外」概念においても、自己を疎外する主体は愛と宗教における抽象的人間として把握されるにとどまっている。こうした彼らの把握に対して、マルクスにおける「疎外」概念の特徴は、現実の社会的存在たる人間労働の弁証法的なありかたを表わす点にある。つまり、人間と社会を産出し発展させる現実的労働が労働主体に対して疎遠な対象として独立化

し、この対象がむしろ主体を制御するようになること、そしてそのことの発展は同時に右の対立を揚棄する必然性をふくんでいること、こうした労働のありかたを表わす点にその中心的意義がおかれているのである。

他方、マルクスは、人間労働自身の特質をつぎのようにとらえていた。それは、「肉体的欲求からの自由のなかで」行なわれる「精神的肉体的エネルギーの発露」であり、「意識的な活動」である。「全自然を再生産する」活動であり、「対象にその〔対象〕固有の規準をあてがう」（つまり自然法則を発見し利用する）という特徴をもつ、さらに分業にみられるような「類的活動」、「共同体的な社会的な活動」である。そして人間はこの労働を通じて、「人間的欲求を充足」し、「生命発現の喜び」や自分が「共同体的存在であることを確認したと意識する喜び」を味う、等々。彼は、「市民社会」では労働のこうした諸本性が転倒して現われ、労働の対象化が「対象の喪失および対象への隷属として、〔対象の〕獲得が疎外として」現われることを明らかにする。

それゆえマルクスが、「労働の疎外」、「疎外された労働」という概念を駆使して「市民社会」の経済的事実や経済学を批判的に検討しようとしていることは、ごく一般的にいえば、彼が労働主体の立場から、この社会における経済的諸事実や諸概念にあらわれている労働の転倒したありかたをとらえ、かつ、かかるありかたの必然的揚棄を究明しようとしていることを意味しているのである。

## (二)

〔2〕、マルクスは、三大階級および資本、労賃、地代の関連を要旨つぎのようにとらえている。

資本とは労働とその生産物に対する支配力であり、労働の増加は労賃を上昇させずに資本を増大させる。地代は利

子、利潤と同様に労働の再生産費をこえるものであり、借地農と資本家との闘争を通じて確定される（土地所有は商品へ転化され、古い貴族制が最終的に崩壊させられて「貨幣貴族制」、「資本の純粋の支配」が完成する）。労賃も資本家と労働者との敵対的闘争を通じて決定される。「市民社会」においては、社会の富は、資本の集積と分業の発達を通じて行なわれるが、このことはどんなに有利な場合でも、結局は労働の一面化、労働者の機械への転落、資本への隷属、過剰生産による失業、労賃の下落をもたらさざるをえなくなる。だから労働者の窮乏化は彼らの産物であり、彼らによって生産された富の産物にほかならない。つまり、窮乏は今日の労働自身の本性から生ずる。(2)

（2）　第一章では、以上の諸点をごく簡単に指摘するにとどまった。ここで右の諸点を『草稿』の第一稿と「抜粋ノート」の叙述に即してとらえ補足することにする（引用でことわりのないばあいは『草稿』（主として城塚訳〈岩波〉）からのもの、また無括弧の文章は主として私による要約である）。

＊「資本は、労働とその生産物とにたいする支配力〔Regierungsgewalt〕である」（P.40）。「人間的労働が自然産物や加工された自然産物についてなしとげるこの進歩は、労賃を増大させるのでなく、一方では利得をあげる諸資本の数を……増大させる」（P.44—45）。資本にとって決定的な動機は、「彼自身の利潤という観点である」（P.45—46）。「蓄積、それは私的所有の支配のもとでは少数者の手中への資本の集中である」（P.48）。蓄積と競争においては、大資本は小資本を駆逐する（P.50—51）。

＊「……地代は必要な生産費の部分に入らない。利潤もまた生産費の部分ではない。……つまりそれらの（労働などの——水谷）再生産費用……これをうわまわるもの、これ以上のものが利子と利潤、小作料と地代となるのである。したがってすべての物の価格はプルードンがすでに展開しているように高価すぎるのだ」（「ノート」、P.50—51）。「地代は借地農と地主とのあいだの闘争を通して確定される」（P.65）。地主が社会の富の増進に利害関係をもつといわれるが、「この増進は窮乏や奴隷状態の増進と同じことなのである」（P.71）。競争の最終結果は、「全体としては、もはや住民の二つの階級、労働者階級と資本家階級とだけが存在することになる。……土地所有が商品へ転化することは、古い貴族制の最終的崩壊であ

り、また貨幣貴族制の最終的完成である」（P.75—76）。「……土地所有、つまり私的所有の根源が、私的所有の運動のなかに完全にひきずりこまれて商品になること、所有者の支配が、私的所有の、資本の純粋な支配として、すべての政治的色あいを脱して現われること、有産者と労働者とのあいだの関係が、搾取者と被搾取者の国民経済的関係に還元されること、自分の財産にたいする所有者の人格的関係がすべて廃棄されて、その財産がただ事物的な物質的な富となること、……こうした諸事態がおこらざるをえないのだ」（P.77—78）。

＊「概念のうえでいえば、地代と資本利得とは、労賃から差引かれる諸控除［Abzüge］である。しかし現実には、労賃は土地と資本とが［自分から差引いて］労働者に引きわたす一つの控除であり、労働者への、労働への……譲与である」（P.27）。「労賃は資本家と労働者との敵対的な闘争を通じて決定される」（P.17）。「……労働者にとってのみ、資本と土地所有と労働との分離は、必然的な、本質的な、しかも有害な分離なのである。……労働者にとっては、資本と地代と労働との分離は致命的である」（P.17—18）。「労賃にとって最低の、どうしても必要な水準は、労働者の労働期間中の生活を維持できるという線であり……労働者という種族が死滅しないですむという線である」（P.18）。

「富が増進しつつある社会……この状態は労働者にとって唯一の有利な状態である」が、この場合でもつぎのことが不可避になる。「労働者自身の労働が他人の所有物としてますます彼に対抗するようになること、そして労働者の生存と活動とのための諸手段が、ますます資本家の手中に集中されること……。資本の集積は分業を拡大させ、分業は労働者の数を増大させる。また逆に、労働者の数は分業を拡大させ、同様に分業は資本の集積を増進させる。一方でのこの分業と他方での資本の集積とともに、労働者はますます一途に労働に、しかも特定の、きわめて一面的な、機械的な労働に依存するようになる。こうして労働者は、精神的にも肉体的にも機械にまで下落させられ、ひとりの人間から一個の抽象的活動および一個の胃袋となるが、それに応じて彼はまた、市場価格のあらゆる動揺や資本の投下や富者の気まぐれに、ますます左右されるようになる」（P.21—22）。「資本の集中はより大きくなり、大資本家は小資本家を破滅させ」（P.22）。「労働者の数が増加したために、労働者自身のあいだの競争はますます激しくなり、ますます不自然に、ますます暴力的になる。……したがって、労働者にもっとも有利な社会状態のなかでさえ、労働者にとっての必然的な結果は、過重労働と早死、機械への転落、労働者に敵対して物騒に集積される資本への隷属、新しい競争、労働者の一部の餓死または乞食化である」（P.22—23）。

＊「国民経済学者によれば、労働者の利害は社会の利害にけっして対立しない」。「しかし労働そのものは、現在の諸条件のもとでのみならず、一般に労働の目的が富のたんなる増大にあるかぎりでは、私はあえていうが、労働そのものは有害であり、破滅的である。このことについては、国民経済学者は気づいていないが、彼の説明からそう推論されるのである」（P.26—27）。「衰退しつつある社会状態においては、労働者はもっとひどく苦しむ」。「しかし、進歩しつつある社会状態においては、労働者の没落と貧困化は、彼の労働の産物であり、彼によって生産された富の産物である。窮乏、それはこうして今日の労働そのものの本質から生ずるのだ」（P.27）。「国民経済学が、プロレタリアを、すなわち資本も地代ももたず、もっぱら労働によって、しかも一面的、抽象的な労働によって生活するひとを、ただ労働者としてだけ観察しているということは、おのずから明らかである」（P.27—28）。「労働は、国民経済学では、ただ営利活動〔Erwerbstätigkeit〕という形態をとってしか現われないのだ」（P.28）。

## (三)

〔3〕、右の経済的諸関係を「概念的に」把握するため、「この事実の概念を、疎外された労働と表現し」、「この概念を分析」しているのが、『草稿』の一断片〔疎外された労働〕」である。

すでに明らかにしたように、この分析では「疎外された労働」が、（一）、労働生産物の疎外、（二）生産過程内部における疎外、（三）、類からの疎外、（四）人間からの人間の疎外という四つの側面で把握されたのち、労賃も私的所有もともに「疎外された労働」の産物である一方、「私的所有」は労働が疎外される契機だという関連が明らかにされ、したがって労賃がいかに上昇しても、「疎外された労働」と「私的所有」とを前提にする限り、その上昇は奴隷の報酬改善にすぎないという点が明らかにされている。

ここからひきだされている一つの結論は、「一方の側面とともに他方の側面も没落せざるをえない」ということ、

「生産に対する労働者の関係のなかに、人間的な全隷属状態が内包されている」から、「私的所有」等からの社会の解放は、「労働者の解放という政治的なかたちで表明され」、この解放のなかに「一般的人間的解放がふくまれている」ということである。

このあと『草稿』では、「つぎにわれわれは、労働と労働者にとって疎遠なこの人間の、労働者に対する関係、労働とその対象に対する関係を、考察することにしよう」（P.106）と問題が提起されている。しかし草稿は、労働者が「疎外」の否定面であるのに対して資本家は肯定面であることが指摘されかけた部分で失われ、残存していない。おそらくこの問題について明らかにされんとしている一つの要点は、「有産階級とプロレタリアートの階級は、同一の人間的自己疎外をあらわしている」が、前者はこの疎外のうちに「快適と安固を感じており、この疎外が彼みずからの力であることを知っており、また疎外のうちに人間的生存の外見をもっている。後者はこの疎外のうちに廃棄されたと感じ、そのうちに彼の無力と非人間的生存の現実性を認めている」、「前者から対立を維持する行動が生じ、後者からこれを絶滅する行動が生じてくる」[3]、という点であろう。そうだとすれば、右の叙述にひきつづいて『聖家族』でつぎのようにのべられていることも、すでにこの失われた「断片」部分で示唆されようとしたことか、あるいはここでの把握から引きだされうる一つの結論だと考えて大過あるまい。

「いっさいの人間性の捨象が、人間性の外見の捨象さえもが、完成されたプロレタリアートのうちに実践的に完了しているために、プロレタリアートの生活条件のうちに今日の社会のいっさいの生活条件の、もっとも非人間的な頂点が集中されているために、人間がプロレタリアートたることによって自己を喪失しており、しかも同時にこの喪失の理論的意識をかちえているだけでなく、また……絶対に有無をいわせぬ窮乏――必然性の実践的表現――によっ

て、この非人間性に対する反逆へと直接においこまれているために、そのためにプロレタリアートは自分自身を解放することができるし、また解放せざるをえない。だがプロレタリアートは、彼自身の生活条件を揚棄しないでは、自分を解放するわけにはいかない」。「問題は、プロレタリアートがなんであるか、また彼の存在におうじて歴史的に何をするように余儀なくされているか、ということである。その目的と歴史的行動は、彼自身の生活状態のうちにも、また今日のブルジョア社会の全組織のうちにも、明白に、取り消しようのないように示されている」(M. E. Werke, 2, S.38, 訳、P.34)。

(3) 『聖家族』、M. E. Werke, 2, S.37, 訳、P.33,

(四)

［4］、交換、分業、貨幣、私有財産の諸関係については、主としてつぎのような把握が特徴的である(この点は、第一章でほとんどふれえなかったので、「抜粋ノート」の「ミル評注」を中心にその要点を示しておこう)。

＊ 生産における人間活動やその生産物の交換は類的活動である。「人間が世界を人間的に組織」していないあいだは、「人間の共同的存在」も類的活動も疎外された形態をとる(4)(「抜粋ノート」、P.96—98)。

(4) 『聖家族』では、「市民社会の人間」が、「私的利害と無意識の自然必然性というきずなによって人間と結ばれているにすぎない独立の人間、営利活動と彼自身ならびに他人の私利的欲望の奴隷」として特徴づけられている(前掲、S.120, 訳、P.118)。「ノート」でいう「疎外された人間の社会」の一面を示したものといえよう。

＊ 私が自分の私有財産を他人に譲渡するとそれは私のものではなくなり、私から独立した外在的事物になる。こ

のことがどのように行なわれるかを国民経済学は正しく必要と欲求にもとめている（前掲「ノート」、P. 99—100）。だから交換は私的所有の枠内での人間の社会的類的行為であり、「外在化された類的行為」、「社会的交通」である（同、P.101）。交換において私有財産は他の私有財産と等値され、相互に等価物になっている。等価物としての私有財産は価値（直接には交換価値）であって、私有財産の価値定在はその直接的定在とは区別された私有財産の単に相対的定在である（同、P.102）。

＊　未開状態においては、生産の限度は直接的欲求の範囲に限られており、交換は生じない。だがひとたび交換が生ずると剰余生産が生じ、労働が部分的にせよ営利を目指すものになり、生産物は価値として生産されるようになる（同、P.103, P.111）。他方、人間的活動の相互補完と交換が分業として現われる。「分業は、疎外の内部での労働の社会性についての国民経済学的表現である。いいかえれば、労働とは外化の内部での人間的活動の一表現、生命外化としての生命発現の一表現にすぎないのであるから、分業もまた……類的存在である人間の活動としての、人間的活動が、疎外され外在化されて定立されたもの」である（『経・哲草稿』、P.168）。この分業の内部では、生産者の仕事が一面化し、労働はいっそう営利労働になっていく（「ノート」、P.103）。そして生産物はますます等価物になる。こうして全生産物が交換されるようになり、等価物は貨幣という形態をとるようになる（同、P.105）。国民経済学は、この発展全体を偶然的必要の所産としてしか解しえない（同、P.105）。

＊　以上から明らかなように、貨幣の本質は、人間相互の活動——人間の産物をとおして相互に補完されあう媒介的活動——が疎外されて物の属性になっている点にある（同、P.87）。人間自身が人間の仲介者になるのではなくこの疎遠な仲介者（事物）を媒介にせざるをえないということによって、本来の人間的活動や諸関係がそれらから独立

した力として現われる。「本源的関係のこの転倒」(同、P.87)、「疎外された事物の人間に対する完全な支配」(同、P.105)が現われる。「貨幣が一切の人間的および自然的な性質を転倒させまた倒錯させること……神的な力――は、人間の疎外された類的本質、外化されつつあり自己を譲渡しつつある類的本質としての、貨幣の本質のなかに存している。貨幣は人類の外化された能力である」(『経・哲草稿』、P.183―184)。

(五)

〔5〕、これまでにみてきた諸把握は、つぎのような国民経済学の批判と表裏一体をなしている。

近代産業の産物たる国民経済学が労働を「唯一の原理」としつつ、資本と労働との「反比例的関係を分析」したことは偉大な進歩である(『経・哲草稿』、P.109―110)。とくにリカード学派は、労働を富の唯一の本質としていっそう徹底的に展開して地代にとどめの一撃を与え、この学説の帰結が人間に敵対的なものだということを立証している(同、P.121―122)。しかし、彼らは私的所有をはじめすべてのものをあらかじめ前提してしまい、運動の関連を概念的に把握しない(同、P.84―85)。彼らは「人間を承認するような外見のもとで、むしろただ人間の否認を徹底的に遂行するものにすぎない」(同、P.120)。彼らは、資本と労働との結合した状態を、資本家と労働者との統一として想定するが、これは「天国のような原始状態」である。どのようにしてこれらの契機が二つの人格として対立的に分裂するかを、彼らは一つの偶然的、外面的なこととととらえている(同、P.159―160)。彼らの原理はこのように分裂しているが、この分裂は産業の現実的分裂によって与えられている(P.122)。

なお、『聖家族』では、プルードンの経済学批判は従来の経済学の前提にとらわれており、「経済学的疎外の内部

で経済学的疎外を揚棄する」ものになっていること、「『平等な占有』という観念は……人間の人間にたいする社会的関係である、ということの経済学的な、したがってなおまだ疎外された表現である」こと、が示されている(5)（前掲、S.44, 訳、P.40）。

（5）　こうしたプルードン批判は、「経・哲草稿」（「第三草稿」）におけるプルードンの評価をより詳しく展開し、発展させた結果ともみなしうる（『草稿』P.160—161）。

［6］、「疎外された労働」の揚棄と共産主義について。「疎外された労働」と私的所有は、同一の関係の二つの側面であるから、一方が廃止されれば他方もなくなる。従来までの共産主義は、最初の形態にあっては、私有財産の均分化を主張しつつ、女性の共有とか才能の無視等の見地をふくんだものであったから、「私有財産の普遍化と完成」を主張したにすぎない。さらに一歩進んだ共産主義も、国家の止揚とか「人間の自己疎外の止揚」という自覚をもっていたとはいえ、私的所有がこの疎外の土台になっていることを十分に見抜きえないで、その揚棄をたんに法や政治の改善に求めたりする不完全さを有している。

だが、私有財産は疎外された人間的活動の物的表現であり、その運動（生産と消費）は人間の現実化の運動の感性的表現であって、国家や法律、道徳等は生産の特殊なありかたにすぎず、生産の一般的法則に服する。したがって私的所有の積極的止揚は、「あらゆる疎外の積極的止揚であり、したがって人間が宗教、家族、国家等々からその人間的な、すなわち社会的な現存へと還帰すること」である（同、132）。こうして、われわれのいう共産主義は、「人間の自己疎外としての私有財産の積極的止揚としての共産主義、それゆえにまた人間による人間のための人間的本質の現実的な獲得としての共産主義」である（同、P.130）。この共産主義においてはじめて、人間の本質的諸力が全面

的に展開される。「ここにはじめて人間の自然的なあり方が、彼の人間的なあり方となっており、自然が彼にとって人間となっているのである」(同、P.133)。なお、以上の立場からすれば、私的所有の思想を止揚するには考えられた共産主義でこと足りるが、現実の私的所有を廃止するためには現実の共産主義的行動が不可欠となる(同、P.161)。

× × ×

以上からも明らかなように、『経・哲草稿』は、それまでのマルクスの哲学的研究の成果たる弁証法的方法と唯物論的見地をば、「市民社会」の社会経済的研究や共産主義的諸思想の検討へ適用した成果にほかならない。ここにつらぬかれている「基本線」は、「市民社会」における人間の転倒したありかたを労働を基本にしてとらえつつ、その揚棄の必然性とその揚棄の担い手(主体)とを明示し、共産主義による人間の全面的解放を明らかにせんとするところにある。それゆえ、『経・哲草稿』は、「マルクス主義の三つの源泉」を批判的に摂取しつつこれを融合したところの初期「社会主義論」の、(またはそういってよければ)いわば「人間解放論」の、多少ともまとまった核心的論考ととらえることができる。

そしてこの論考において、人間労働の転倒したありかたとその揚棄の必然性を把握するさいに、「労働疎外」または「疎外された労働」という概念が基本的概念として駆使されていることに着目し、この視点から右の論考を「整理」し、これを初期「労働疎外」論と名付けることができる。昨今、マルクスの「疎外論」なるものが流行しているが、マルクス自身は彼の論考に「疎外論」とか「労働疎外論」という固有の論題を付したことは一度もなかった。わかりきったことだが、念のため注意しておかねばならない。

## 第二節　初期「労働疎外」論と『資本論』との関連に関する一見解の検討

### (一)

右の節題でいう一見解とは、いわゆる「宇野学派」に属すると思われる塚本健氏の見解「物化と自己疎外」（『思想』一九六八年八月号所載）である。この見解には、本稿と正反対の諸主張が提示されているので、それを簡単にでも検討しておくことは、ある程度問題点を浮彫にでき、次節で若干の結論をひきだすために有益であろう。

氏の見解は、初期「労働疎外」論が『資本論』にとって「邪魔物」であり、それを放棄することによって『資本論』が成立したという点をその基本としている。すなわち、初期「労働疎外」論はヘーゲル的労働観を克服し切っていなかった、『経済学批判要綱』に至ってかかる弱点が克服されるようになる、ここに至って初期「労働疎外」論は「物化論」になるが、マルクスはこの「物化論的観点」をあてはめて「資本と労働との交換」を説こうとして困難に逢着し、その過程で剰余労働と労働力商品という概念を生みだしてこの困難を解決する、こうして『資本論』が完成することになる、しかし「労働疎外論」は、『資本論』においてもまだ「物化論」というかたちで残存する、「物化論」は「単純流通の説明としても誤り」だし、「資本制的生産様式の理論的再構成にとっても」不要である、――あらまし以上のような主張がこの見解の骨格をなしているといってよい。

以下、こうした主張のいくつかを引用しながら検討してゆくことにする。

**イ**、まず、初期「労働疎外」論が「ヘーゲル的労働観」をうけついでいる点で弱点をもっているという主張をみて

みよう。

「……経哲草稿では、労働は労働時間の問題として論じられていないため、結局、人間労働は、本来は、肉体的欲望から自由であるかのようにとかれている。労働を労働時間として問題にしない人間学的考察方法の限界が示されたといえよう」（前掲、P.84）。「マルクスは……ヘーゲルの労働観を批評しているが『労働を人間の本質として、自己を確証しつつある人間の本質としてとらえる』（城塚訳、二〇〇ページ）という点ではヘーゲルをうけついでいる。剰余労働を予想させる肉体的欲望から自由な労働によって、人間の自由、人間の類的性質をとらえようとした点は、ヘーゲルとちがうマルクスの特色であり、人間にかんする適確な着眼点であったがここでは十分に展開されなかった。したがって、マルクスの自己疎外の規定はヘーゲルの労働観の延長上にあるといってよい」（同、P.84—85）。「労働疎外論はもともとその根底に人間の本質は労働であるというヘーゲル的労働観をもつものであった。それは、……必要労働・剰余労働という概念じしんによって、みずからの基礎とする労働観を否定される運命にあった。剰余労働という概念は、労働疎外論にとって、いわば鬼子だったのである」（同、P.94）。

みられるように、氏によれば、初期「労働疎外」論の労働観は、「人間の本質は労働であるというヘーゲル的労働観」の「延長線上」にあり、「労働を労働時間として問題にしない人間学的考察方法の限界」をもつものと特色づけられている。

しかし第一に、「人間の本質は労働である」という把握自体は、ヘーゲルにおける労働の弁証法的なつかみかたとともに『資本論』へ一貫してうけつがれている観点であって、このことは『資本論』のいくつかの叙述に明示されているとおりである。一方でかかる積極的側面をうけつぎつつ、他方で「ヘーゲル的労働観」の一面性と観念性とを根

本的に批判したところに、当時のマルクスの「労働観」が成立したといえよう。この点については、すでに多くの研究で証明されているし、本稿第一章でも指摘してあるので、『経・哲草稿』からつぎの叙述を引用しておくだけでよいであろう。「ヘーゲルは近代国民経済学の立場に立っている……彼は労働の肯定的な側面を見ない……ヘーゲルがそれだけを知り承認している労働というものは、抽象的に精神的な労働である」（前掲訳、P.99—200）。

第二に、「人間の本質は労働である」という労働観のために「労働を労働時間として問題にしない」弱点があったといわれるが、人間の本質を労働ととらえるとなぜ時間的側面の考察が欠如してしまうのであろうか（論証がないのでさっぱりわからない）。当時のマルクスの「労働観」は、この側面の考察を一概に拒否する性質のものだとは考えられないのであって、現に『経・哲草稿』をみれば、古典派経済学者の言葉を借りながら「昔と今日との通常の労働時間ということが注目されねばならない」[6]として、機械の充用による労働時間の延長がとりあげられているし、「資本家にとって労賃の上昇〔による損害〕は、労働時間の量の縮減によっておぎなわれてあまりあるということ」[7]が指摘されている。さらに、右の『草稿』とほぼ同時期の「ジェームズ・ミルに関するノート」では、欲求の限度での生産とそれをこえる剰余生産との区分が示されている。[8]さらにまた、『草稿』と同年に書かれた『聖家族』では、生産物の「生産に費やされる労働時間がそのものの生産費のうちに入ること」、「直接に物質的生産についていえば、あるものを生産すべきかいなかの決定は……実質的にはその生産に費やされる労働時間にかかる」ことが明示されている。[9]

（6）『経・哲草稿』（前掲訳）、P.29—30,

（7）同、P.24,

(8)　『マルクス経済学ノート』(前掲訳) P.111—112,
(9)　『聖家族』(M.E. Werke, 2, S.51—52)。

## 〔1〕

ロ、つぎに、『資本論』における物化論は「労働疎外」論から派生したものであって、不要なものだという主張についてみてみよう。

「労働疎外論から派生したものとして、物化論が登場する。物化論は、労働疎外の考えに源を発し、それを単純流通にあてはめたものである。だから、そこで把握される『物化された関係』は、流通関係としては労働、生産とは関連をもたないが、物化される前の状態では労働と労働の関係であったとされる。つまり、労働が対象化されて生産物になるという労働疎外の第一規定が根本になって、そこから、労働と労働の関係の貨幣を軸とする労働生産物と労働生産物の関係への転化がとかれ、この転化が物化とよばれる」(前掲、P.85—86)。

「物化論の特徴は、商品の物神性の強調にあり、それはたんに労働疎外を労資関係で、生産手段としての労働生産物の疎外としてとらえるだけのものではない。それは、商品の譲渡・取得を労働の譲渡・取得として把握し、商品交換関係は労働と労働の関係の物的表現であり、前者は物と物との関係で後者は人と人の関係であるとみる。このような単純流通の理解は、すでに労働疎外論による労資関係の説明が労働力商品の規定にもとづく科学的説明にとって代られたあとでは、労資関係説明の手段としても無意味であり、単純流通の説明そのものとしてもまちがっている。『商品形態の神秘にみちたものは、単純につぎのことすなわち商品形態は……総労働にたいする生産者の社会的関係

を、かれらの外にある対象の社会的関係として反映するということにある』（Marx,K., Das Kapital, Bd. I., Dietz Verlag, S.77,……）という規定は、資本主義生産様式の理論的再構成にとり不可欠の規定とは思われない」（前掲、P.92）。

第一に、「物化論は、労働疎外の考えに源を発し、それを単純流通にあてはめたものである」という主張は、「物化論」（生産関係の物化に関する考察）の極端な矮小化でしかない。なぜなら、『資本論』第三部の最終篇「収入とその源泉」でも明示されているように、この問題の考察は『資本論』全巻をとおして展開されるべきものだからである。

第二に、右の引用文で、「労働が対象化されて生産物になるという労働疎外の第一規定」という表現がみられるが、この表現は、労働の対象化とこの対象の獲得がイコール労働疎外だという理解を示すものといわざるをえない。だが、かかる理解は超歴史的な理解であり、マルクスのそれとは事実上まったくあいいれないものである。このことは、『経・哲草稿』におけるつぎの叙述をみるだけでも明白である。

「労働の実現は労働の対象化である。国民経済学的状態のなかでは、労働のこの実現が労働者の現実性剝奪として現われ、対象化が対象の喪失および対象への隷属として、〔対象の〕獲得が疎外として、外化として現われる」（前掲、P.87）。

第三に、「物化論」は、「商品交換関係は労働と労働の関係の物的表現であり、前者は物と物の関係で後者は人と人との関係であるとみる」という主張も間違いである。

マルクスは、商品交換関係は物の関係で労働の関係は人の関係だ、などということはどこにもいっていない。商品交換を単なる物の関係としてとらえるのは生産当事者やブルジョア経済学者である。商品交換をば、物的形態とその

諸関係によって隠蔽されている特定の社会的関係としてとらえること、労働における人間の特殊な社会的関係が物的形態として自立化し、この物的形態の運動によって人間の関係が支配され、発展させられること、この必然的諸関連を解明する点にこそ、「物化」論ないし「物神性」論――というよりもむしろマルクス経済学――の眼目があるのである。せっかく「商品交換は労働と労働の関係の物的表現」だといったあとで、改めて「前者（商品交換）は物と物の関係で後者（労働と労働の関係）は人と人の関係である」（括弧内は引用者）と区別していってしまうところに、「物化」とか「物神性」に関する無理解がうかがわれるといえよう。

ましてや（第四に）、「物神性」に関する基本的説明を誤りとし、それを「資本主義生産の理論的再構成にとり不可欠の規定とは思われない」と――論証もぬきで――独断的に主張するに至ってはもはや論外である。えてして、こうしたたぐいの見解を主張する人たちに限って、経済的諸範疇の論理的関連を生きた人間の生産関係およびその発展法則からきりはなし、ただ単に論理のつじつまあわせに熱中するもののようである。

## (三)

ハ、つぎに、「労働疎外論とは、その人間学的意味づけをはなれていえば、労働を譲渡する、売るという事態は、経済学の概念でどのように科学的にとらえることができるかを論じる議論であった」（P.91）、「資本論全三巻を貫ぬく基本概念としては、労働疎外の規定は労働力商品の規定にとってかわられた……」（P.92）という主張をとりあげてみよう。

「労働疎外」論は「人間学的意味づけをはなれていえば」、労働の販売に関する論だといわれているが、理論的に

なぜそういいうるのであろうか。他の箇所で、本来商品の譲渡を意味したAlienationが独訳されて自己疎外をも意味するEntfremdungになったという指摘があるが、こうした訳語上の指摘はなんら理論的根拠をなすものではないであろう。他方、「人間学的意味づけ」という表現もすこぶる曖昧な表現である（いわゆる「人間なるもの」の考察を批判したのはマルクスである）。

すでにくわしく論証したように、「労働疎外」論の特質は、労働主体（プロレタリアート）という視点から「市民社会（ブルジョア）」における労働の転倒したありかたと彼らによるその揚棄の必然性を究明するところにある。問題は、この究明がどのように発展させられているかに存する。労働力商品の性格をとらえ、剰余価値発生の秘密を解明することは、右の究明を科学にするうえで決定的要点の一つではあるが、だからといって、この部分だけが、プロレタリアートのありかたと彼によるブルジョア社会の揚棄の必然性を究明する部分だとはいえない。

「資本論全三巻を貫ぬく基本概念としては、労働疎外の規定は労働力商品の規定にとってかわられた」というのも、さきの文章とのつながりでみれば、「労働疎外」を「労働の譲渡」（売り）という意味に一方的に限定することを前提にした主張である。だが、かかる限定がマルクスの「労働疎外」把握とまったく別箇のものだということは明瞭である。すでにみたようにマルクスは、労働力商品という概念を発見したのちに、賃労働が疎外された労働であり、疎外の現実的行為は資本の生産過程、搾取過程だということ、労働力の売買は右の過程の基本的前提をなすということ、を明示している。なお、「資本論全三巻を貫ぬく基本概念」を労働力商品としてしか示しえぬ粗雑さには、「資本、賃労働、剰余価値等々の概念はそうではないのか？」という問を対置しておけばよい。それはともかく、「労働疎外」論をこの論者のごとく規定することは、マルクスの「労働疎外」把握を、一方でその基本的側面（資本の生

産過程）を欠落させた「流通主義的」規定にわい曲し、他方で「人間学的意味づけ」という曖昧きわまる超階級的規定にしてしまうことでしかない。

（四）

二、「一八五七年『要綱』と一八五九年『批判』のあいだには、マルクスの経済学の方法について、決定的な転換、つまり哲学的方法の清算と経済学の経験科学としての確立があったとみられる。……（『資本論』――引用者）そのなかでは、労働疎外という概念は、論理的展開のなかで不可欠な一環としての位置をみいだせず、むしろ論理的展開にとり不明確な点を残存させていると思われる。人間疎外という当初の哲学的概念が……労働力商品という概念で把握しなおされたとき、労働疎外の規定は、前者から後者への移行を媒介するというその役割を了える……。以上のように、経済学哲学草稿、経済学批判要綱、資本論のあいだには、人間疎外という問題意識は一貫して流れているが、それを科学的に把握するという試みの上では(1)労働疎外という概念の設定、(2)経済学の体系的展開のなかでの労働疎外の再検討、剰余労働という概念の導入、(3)労働力、価値形態という概念の導入と労働疎外論からの脱皮、経験科学的方法による資本主義生産様式の理論的再構成という三つの段階が認められる」（同、P.81）という主張について。

第一に、いわゆる哲学的方法の清算は『ドイツ・イデオロギー』で行なわれ、ここで確立された史的唯物論的方法が経済学の「導きの糸」（基本的方法）になったことは、いまさらいうまでもない。『経済学批判要綱』と『経済学批判』とのあいだで「方法上の決定的な転換」があったというのは、まことに珍奇な発見といわねばならぬ。引用文の後半では、経済学上の「発展」の三段階についてのべられているが、この点と前半の叙述内容とを照応するものと

してまとめてみると、第一段階『経・哲草稿』に対して、第二段階『要綱』、第三段階『批判』および『資本論』ということになり、この第三段階で「労働力概念の導入と労働疎外論からの脱皮」が行なわれ、「経済学の方法上の決定的転換」が行なわれたということになる。そうだとすれば、これは事実を否定した驚くべき暴論である。なぜなら『要綱』においてこそ、労働の二面性が発見され、労働力と労働との区分が明らかにされているからである。そもそも、この事実は、氏自身が他の箇所で「『要綱』では、労働力能概念、剰余労働概念の導入により（「困難」が――引用者）解決され、自己疎外は基本的には科学的に解明された」（同、P.91，傍点は引用者）と認められているところでもある。『要綱』が「自己疎外」を「基本的には科学的に解明」したのだとすれば、そのうえに一体どういう「方法上の決定的転換」が必要なのであろうか。

第二に、氏の見解においては、『経済学批判要綱』の単純流通に基づく「資本と労働の交換」に関する分析は「疎外論」的欠陥をもつものとされ、労働力概念の発見もこの欠陥から生じた「ゆきづまりとその打開の試み」（P.96）として説かれている。つまり、『資本論』の形成における「労働疎外」論の意義は、もっぱら消極的で媒介的な意義――「説明のゆきづまり」をもたらし、「打開の努力」を強いる限りでの媒介的意義――しかもちえぬものとされている。かかるとらえかたは、既述してきた「労働疎外」論の誤った把握からくる当然の帰結である。「労働疎外」論といえばもっぱら初期『経・哲草稿』のそれとしてとらえ、かつそれを否定面で特徴づけ、のちの「労働疎外」に関する論述はその発展でなく残存とみなすというのでは、全体を貫ぬく積極的側面の発展と深化、総じてマルクス経済学の弁証法的発展過程は決して正しくつかみえない。

なお他の箇所ではあるが、労働力概念が発見され、「労働疎外論」が克服されたことによって「労働疎外」概念は

ほとんど使われなくなった、という主旨の見解（P.91—92）がみられるので、これにも一言つけくわえておかねばならない。「労働疎外」概念が使用されていないことは、この概念が不適切だとか誤っていることを論拠づけはしない。また、この言葉が使用されているかどうかという問題と、この言葉によってとらえられてきた労働主体の転倒したありかたとその止揚の必然性に関する把握が『資本論』でどのように展開されているかという問題とのあいだには区別が存しているのであって、初期「労働疎外論」と『資本論』との関連が問われるさいには、当然あとの問題の考察が主要な内容になるのである。論理展開のなかでこの概念が必要かどうかなどという問題のたてかた自身のなかにも、すでにこうした点への無理解がうかがわれるといってよい。

## 第三節　「労働疎外」論と『資本論』との関連に関する若干の結論

### (一)

これまでのすべての考察から、初期「労働疎外」論と『資本論』（その諸草稿をもふくむ）との関連について、つぎのような若干の結論をひきだすことができる。

〔一〕、初期「労働疎外」論では、「市民社会」における人間労働の転倒したありかたとその揚棄の必然性が労働主体の（事実上でプロレタリアート）の立場からさきにみたようなかたちで究明されている。他方、『資本論』の最終目的が、近代社会の経済的運動法則を解明してプロレタリアートの世界史的地位と役割を明示し、共産主義運動と共産党の理論的土台を与えるところにあったことは明瞭である。

それゆえ、初期「労働疎外」論と『資本論』の双方には、つぎのような共通の意図または姿勢が認められる。すなわち、ブルジョア経済体制の根源を資本＝賃労働関係に求め、そのもとでの労働主体（プロレタリアート）のありかたと彼らがブルジョア体制を揚棄し共産主義を実現する真の「主体」、担い手だという心然性を明示し、プロレタリア革命と全人類の全面的解放のための理論的根拠を提供しようとする意図ないし姿勢がこれである。マルクスにとっては、自分の理論的研究は自己目的や個人的利害のためのものではなく、あくまで以上のような課題を解決するためのものであり、一貫して、プロレタリアートの立場につらぬかれたものであった。

こうした視点からすれば、初期「労働疎外」論と呼ばれてきた『経済学・哲学草稿』の内容なり性格は、むしろ初期における「人間解放論」または「社会主義論」の核心的部分と特徴づけた方が適切であろう。逆のいいかたをすれば、はじめて「人間解放論」なり「社会主義論」が経済的研究によって根拠づけられようとしたさいに、「労働疎外」概念が「槓杆（てこ）」として駆使されていることに着目し、この視点から当時の諸論考を（われわれが）そう名づけているのである。

したがってまた、初期「労働疎外」論と『資本論』との関連を考察するばあいには、「市民社会」におけるプロレタリアートのありかたと彼らによるその揚棄、および彼らによる共産主義の実現、全人類の全面的解放という観点を絶対に看過してはならない。

## （二）

［二］、初期「労働疎外」論が、「初期」に特有の多くの未熟さをふくんでいたのは当然のところである。一八四

四年当時、経済学の研究は着手されたばかりであり、経済史の知識もきわめて不完全なものであって、生産が全社会生活の土台をなしているという認識はえられていたが、生産力と生産関係という概念もそれらの運動の必然的関連も発見されていなかった。[10] そして、こうした制約が、当時の「労働疎外」論におけるつぎのような未熟さとして表現されざるをえなかったのである。

〔イ〕、人間や労働を把握するさいに、まだ抽象的で不正確なとらえかたを残している。たとえば、すでにフォイエルバッハの水準を越えていたとはいえ、人間の本質を「類的存在」、「類的活動」と規定しつつ、主としてこの本質が私的所有のもとでいかに疎外されるかという点から経済学の研究が行なわれている。さらに、人間の労働自体と疎外された人間の労働とが、同じ「労働」という概念で示されている。[11] もちろん、まだ労働の二面的性格も発見されていない。

〔ロ〕、私的所有、交換の発生およびそれらと分業との関連についての研究が不十分であり、この点に関する古典派経済学者たちの把握が十分に克服されていない[12]（むしろ、この問題の考察は今後の題課として提示されている）。

〔ハ〕、「私的所有」という概念が使われる場合、本来的私的所有と資本制的私的所有との区分が明確にされていない。他方、「疎外された労働」の概念は、単純な商品をつくる労働という意味にも、賃労働という意味にもとれるまま使用されている。そして、「私的所有」と「疎外された労働」という概念がいわば「基本概念」とされ、この両概念から出発して、貨幣をはじめとするすべての諸範疇を展開しうるという把握（「方法」）が示されている。

〔ニ〕、「私的所有」と「疎外された労働」を揚棄する物質的諸条件（労働の社会化）の成長がどのように行なわれるかという点については、ほとんど明らかにされていない。また、共産主義社会についても、その経済的構造の諸

特質の研究はなされていない。

以上、総じていえば、「初期」の未熟さは、資本の客観的運動の分析が基本になっておらず、「労働疎外」の必然性がブルジョア的生産諸関係の経済学的分析の結果として論証しきれていない点にあるといえよう（とはいえ、これらの未熟さは、積極的諸側面と表裏一体をなすものとして評価すべきであり、より発展した把握や新たな発見への思考の「発酵」、「苦闘」の内的過程として、全体的に理解すべきである。そうしないで、単に『資本論』と比較してその未熟さを摘出するだけに終るならば、それは無意味な結果論でしかない）。

初期「労働疎外」論では、諸個人が労働する主体としてとらえられ、いわばかかる個々の人間のあり方が主要な観点にされていたのに対して、『資本論』では、個々人は経済的範疇の人格化としてのみ扱われ、人間から自立した資本がブルジョア的生産の主体として把握されつつ、その客観的運動法則が究明されている。前者は、「労働疎外」概念をてこにして古典派経済学を批判的に研究するなかで、「市民社会」における人間労働の転倒したあり方とその揚棄をほぼ正確に「素描」することによって、はじめて「社会主義論」を基礎づけ展開しようとする試みである。前者はその点で『資本論』の課題と任務をはじめて浮彫りにし、その「スタート台」を確立したものであるとすれば、後者は、前者の未熟さを完全に克服し、プロレタリアートの世界史的地位と役割とを科学的に論証した成果――科学的社会主義の主要内容をなすもの――にほかならないのである。

(10)　本稿第一章（『立教経済学研究』第二十五巻第二号、P.27―29）参照。

(11)　『経・哲草稿』（前掲、岩波文庫版）、P.87, 110, 141, 168, 参照、なお、こうした表現は、『ドイツ・イデオロギー』においても、「私的所有と労働そのものとの廃止」というかたちでみられる（M.E. Werke, 3, S.54, 訳、P.50）。ここで「労働の廃止」といわれている「労働」が、「労働の現代的形態」を意味していることは、同書の他の箇所（S.70,

訳，P.66）から明らかである。

（12）　この点は、一八四四年の「経済学抜粋ノート」におけるこの問題に関するとらえかたと、『経済学批判要綱』のとらえかたとを対比するだけでも明白になる。たとえば、前者においては、「人間の真の共同的存在は……諸個人の必要とエゴイズムによって、すなわち、彼の定在そのものの活動をとおして直接に生みだされる」が、この「共同体」が疎外された形態におかれるとき、交換や貨幣がその疎外の一形態としてあらわれるという把握がある（前掲「経済学抜粋ノート」、P.96—97，P.111—113，その他参照）。ここでは、交換の発生を個々人の私的利益や「自愛心」から説く古典派経済学者らの見地が生かされているが、『要綱』では、この点に関してつぎのごとくのべられている。

生産における生産者相互の依存性は、「交換のたえざる必然性と全面的な媒介者としての交換価値とのなかに現われている。経済学者はこのことをつぎのように表現する。各人は、その私的利益を……追求する、そしてそれによって、自分ではそれを欲するのでもなく、知ることもないままに、すべての人々の私的利益、一般的利益に奉仕する、と。知恵は各人が自分の利的私益を追求することによって、私的利益の総体、したがって一般的利益が達せられるという点にあるのではない。……問題点はむしろ、私的利益自体がすでに社会的に規定された利益であり、社会によって措定された諸条件内部でのみ、また社会によって与えられた手段をもってのみ達成されうるという点に、したがってこれらの諸条件と手段との再生産に結びつけられているという点にある。それは私人の利益ではある。しかしその内容は、それを実現する形態および手段と同じく、それとは独立したすべての社会的諸条件によって与えられている」（S.74，訳、P.77—78）。

## （三）

〔三〕、初期「労働疎外」論では、「市民社会」における労働主体の転倒したありかたが「労働疎外」として把握され、この「疎外」の基礎が「私的所有」と「疎外された労働」（事実上での資本、賃労働関係）に求められている。そして、右の二つの契機の発展は、自からプロレタリアートによるそれ自身の止揚を必然的にすることが示されてい

る。こうした把握が『資本論』の剰余価値論や蓄積論においてどのように発展、展開されているかはすでに前章で明らかにした。

『資本論』とその諸草稿においては、「労働疎外」の把握自身も「初期」のそれとくらべてより正確に科学的になり、つぎのようにとらえられている。すなわち、「労働疎外」とは、労働主体の側からみると生産手段が彼から失われ資本として自立化し、彼の労働力が商品として資本家に譲渡されて価値増殖の手段としてのみ使用され、労働の生産物も資本家の領有に属して逆に彼を支配するようになること、彼の労働の生産力が彼から失われて資本に属するものになるから、労働生産力の発展が彼の犠牲、窮乏、資本への隷属等々の発展として現われること、これである。したがって、「賃労働は自己疎外された労働」として規定される。他方、右の諸関連は、その発展においてそれ自身を揚棄する主体的、客観的諸条件を成長させてゆかざるをえないのであって、ブルジョア社会におけるこうした人間労働の転倒したありかたは、歴史的にみると、自由な人間社会の現実的基礎を形成しうる労働生産力の創造と発展をば、労働者階級の犠牲において強制する必然的通過点として現われるのである。『資本論』の最終稿の一つ（『直接的生産過程の諸結果』）では、以上の両面においてとらえられる過程が「それは人間自身の労働の疎外過程」であり、「社会的労働の独自な歴史的形態」であると規定されている[13]（本稿第二章序節参照）。

(13)　『資本論』と初期「労働疎外」論との関連について、つぎのような主張がみられる。

「つぎに、もう一つの偏向した見解についてのべなければならない。それはマルクスを初期と後期にきりはなしてしまうことに反対するあまり、マルクスの全学説を疎外論の発展とみる見解があることである。それらの見解の特徴は『疎外』概念や『疎外』理論が『資本論』においても一貫して発展させられていると主張する点にある。これらの見解は、初期の抽象的な疎

外概念がどのように具体的な内容をもつものに発展したかということをみるのではなく、『資本論』のなかに『疎外』という言葉をみつけたり、『資本論』の叙述をおいながら、これも『疎外』だ、あれも『疎外』だ、と規定しているだけである」。「なお『資本論』には疎外ということばが一〇箇所ばかりでてくるが、それはほとんどいまのような意味（「『盗まれる、横領される』という、このことば本来の意味」――引用者）でつかわれている」。そのほか第三巻第四八章『三位一体的定式』においてこの「定式」を「『物神化』の意味でつかっている。また第三巻第一五章で……『ドイツ・イデオロギー』の場合と同じような意味でつかわれている。だが、ここをもってしても、『疎外』概念が『資本論』で発展させられているなどとはいえない。だから『資本論』の叙述を追いながら、……すべてを『疎外』だと規定してしまうやりかたは、マルクスとレーニンがせっかく具体化したことをもう一度「疎外」に還元してしまうことである。マルクスが疎外という抽象的なものから出発しながら、搾取、収奪、隷属、貧困などの内容に具体化したことは、マルクスの思想の発展であり、これをもとにもどしてしまうことは、どう考えても意味のあることではない」（平野喜一郎、「マルクス主義と『疎外論』」、雑誌『経済』一九六九年十一月号、P.62）。

右の主張には、この問題に関する混乱、無理解、誤りが集中的に示されている。たしかに、右の主張が、「疎外」概念を歴史的なものとしてつかむ必要性を強調しつつ、『資本論』をおいながらすべてを単なる『疎外』に還元する傾向を批判し、かかる傾向を階級関係の経済学的分析をぬきにして階級関係を「疎外」という言葉であいまい化するものだと指摘しようとする限りでは、それは疑いもなく正しいといえる。

しかし第一に、「偏向した見解」の特徴点をして、「『疎外』理論が『資本論』においても一貫して発展させられていると主張する点」だというのは、主張者（平野氏）自身の見解をくつがえすものであろう。なぜなら、すぐつづいて、氏自身が初期の「疎外」概念が『資本論』においてどのように「発展したかということをみる」必要を強調しているからである。

第二に、「これらの見解（「偏向した見解」――引用者）は、初期の抽象的な疎外概念がどのように具体的な内容をもつものに発展したかということをみるのではなく……」とか、「マルクスが疎外という抽象的なものから出発しながら、搾取、収奪、隷属、貧困などの内容に具体化した……」とかいう主張も完全な誤りである。マルクスは、初期「労働疎外」論においても、「疎外という抽象的なものから出発」したのではない。当のマルクス自身がのべているように、マルクスは「市民社会」

における経済的諸事実――氏がいわれる「貧困」、「隷属」等々――から出発したのであって、これらの諸事実を「疎外された労働」として「概念的に把握」しただけである。したがって同様に、初期の「労働疎外」論と『資本論』の関連が「抽象的なもの」から「具体的内容」へという関連――つまり、「抽象的なもの」の「具体化」という関係――としてとらえられている点も正しくない。両者の関連は、抽象的なものの具体化という関連にあるのではなく、同じ具体的諸事実、諸関連の把握における発展関係にあるのである。

したがって第三に、右の発展関係を詳細にとらえるためには、「初期」の把握が『資本論』においてどのように発展させられているかを『資本論』に即して、正に「『資本論』の叙述をおいながら」明らかにする必要がある。このさいには、「労働疎外」の現実的なありかたの一つ一つを『資本論』から学びとり、それらを「労働疎外」概念と結びつけて理解することは少しも誤りではない。たとえば、『資本論』の草稿で、資本による人間支配、労働の転倒したありかたが「それは人間自身の労働の疎外過程である」といわれているが、この点をその豊富な内容において究明してゆくことは、単なる抽象的な「疎外論」なるものを批判するためにも絶体に必要なことである。しかし、氏のようないいかたでは、こうしたことさえもが無駄で誤ったこととうけとられざるをえないであろう。また、こうした究明が行なわれるならば、氏の主張とは逆に、初期の「労働疎外」論が「『資本論』においても一貫して発展させられている」ことが証明されるに違いない。

## (四)

〔四〕、初期「労働疎外」論ではつぎのような把握も特徴的であった。すなわち、「市民社会」における経済的諸事実や諸範疇は、人間の本質をなす「類的活動」（事実上の社会的生産活動）の「疎外態」であって、経済的事実や範疇の特質は、人間の類的活動や能力が疎外されて彼とは疎遠な物の属性として現われる点にあること、「完成された私的所有」のもとでは「物による人間支配」が頂点に達すること、古典派経済学は「市民社会」の経済的事実や範

疇を無前提にうけ入れてそれらを生産の歴史的、弁証法的運動においてとらえようとしないこと等々、こうした把握が特徴的であった。

明らかにこうした把握は、事実上で経済的形態規定の本質をつき、ブルジョア的諸範疇を根本的に批判するポイントをなすものである（もっとも、かかる把握が単純な商品という最も基底的な形態規定にそくして行なわれているわけではない。また、諸範疇が生産関係の物化した形態として正確にとらえられるにはいたっていない）。それゆえ、こうした把握が『資本論』の「物神性」に関する分析の「萌芽」をなし、それへ発展させられていることは明らかである。

では、「物神性」に関する論及と「労働疎外」に関する論述とはどういう関連にあるであろうか。

経済的形態（形態規定）とは、労働の、ある歴史的社会的関連（または社会的性質）の必然的な物的表現である。たとえば、個々の独立した私的生産者が自己の生産物を相互に交換することによって社会的生産が成立しているばあい、彼らは各自の私的労働に内在している労働の社会的性格（社会的分業の一環をなし、人間労働一般として共通だという性格）を商品という物的形態で——その商品が他人にとって有用であり、価値物であるというかたちで——表示する。

このさい労働主体は、自己の人間的労働を商品の価値として、彼とは「疎遠」で自立した客体の属性または物的形態として、対象化するが、このことは、彼らが自分の主体的労働を対象として「疎外」することにほかならない。貨幣についても同じことがいえる。「貨幣が一つの社会的性質をもちうるのは、個人が彼ら自身の社会的関連を、対象として自分自身から疎外しているからにすぎない」（“Grundlisse”S.78）。だから、商品や貨幣は、労働主体にとっ

て「疎外された形態」である。

同時に、対象がかかる疎外された形態をとることは、これらの諸形態を生みだす労働の社会的関連がこれらの形態によっておいかくされ、神秘化されることにほかならない。

資本と賃労働をとってみよう。生産手段を失った労働者が「生計」のために生産手段の所有者に労働力を販売し、彼のもとで労働して彼に搾取される関連のなかでは、生産手段は労働者にとって単なる生産手段ではなく、彼にとっては疎遠な他人の所有物であり、彼の労働を吸収し支配する物、資本として現われる。つまり、さきの関連が生産手段という物の自然形態で表現されるとき、この生産手段は資本という形態規定なのである。また、さきの関連が、労働という自然機能で表現されるならば、その労働が賃労働である。資本制的生産関係のもとで労働の社会的形態、生産力が発展するのに応じて、資本も発展した形態をうけとり、生産関係の物化や神秘化も発展する。すでにみたように、協業における共同体的な統一、分業における組合せ、科学や自然力の応用、生産物の機械としての利用等々すべてこれらは労働主体に対して無縁なもの、物的なもの、過去のものとして、彼らにかかわりなく自立して相対立するのであり、彼らに属さずに彼らを支配する労働手段の存在形態として彼らに相対するのである。こうして資本はより神秘的な存在になってゆく。こうしてまた、「資本—利子、土地—地代、労働—労賃という疎外された不合理な形態」（"K"Ⅲ，S．838）においては、「資本制的生産様式の神秘化、社会的諸関係の物化、物質的生産関係とその歴史的社会的現実性との直接的合性が完成」されることになる。

以上要するに、ある程度までに発展した私的所有と無計画的な社会的分業のもとでは、労働の社会的性質や関連が直接にあるがままの姿で現われずに、商品、貨幣、資本等々という物に属する性質、物の自然形態として人々から自

立化し、これらの物自身が独立にとりむすぶ諸関係として現われ、しかもかかる自立的主体たる物の運動によって人々が制約されるのであって、こうした転倒、人々の観念のうえだけでなく現実上での神秘化が形態規定を特質づけるのである。

他方、商品生産が資本家的に行なわれるようになれば、人間（労働者）に対する物（資本）の支配も「労働疎外」も、その端初的形態から現実的なものになる。宗教で現われる主体の客体への転倒とその逆の転倒という関係が、現実の物質的生産過程のなかで現実化するのである。

したがって、「物神性」に関する論考も「労働疎外」に関する考察も、経済的形態をとりあげ、そのもとでの労働の転倒したありかたを解明する限りでは、同じ「接点」を有している。

とはいえ、「物神性」に関する考察は、つぎの点の解明に主眼をおいている。すなわち、経済的形態の神秘的性質の秘密を暴露すること、また生産関係の発展に照応してその物化も神秘化も発展してゆくことを究明しつつ、ブルジョア経済学の全諸範疇における倒錯――物の属性として現われる労働の社会的性質を物の属性自体と混同する倒錯――を批判することに眼目がある。このように、「物神性」に関する究明が物の経済的形態の解明に（したがってブルジョア的カテゴリーの批判）に力点をおいているのに対して、「労働疎外」に関する考察の方は、労働主体（労働者階級）の側からこれらの形態が彼らの生産過程に、それゆえ彼らの歴史的運命にいかなる影響をおよぼすかということの究明に主眼がおかれている。

このような双方の観点（主眼）の相違は、たとえば、「労働疎外」に関する基本的解明が剰余価値論、蓄積論として第一巻でほぼ解明されているのにくらべて、「物神性」に関する論及は、第一巻の第一篇から第三巻の最終篇に至

る全範囲で究明されているというその叙述範囲の相違にも反映しているといえよう。

## (五)

〔五〕、『資本論』の諸草稿ではなく、『資本論』そのもののなかでは、やや狭く限定された意味で「労働の疎外」という言葉が一箇所で使われているにすぎない。[14] また、「疎外された労働」という概念は使われていない。

(14)　「一方では生産過程はたえず素材的富を資本に転化させ、資本家のための価値増殖手段と享楽手段とに転化させる。他方ではこの過程からたえず労働者が、そこに入ったときと同じ姿で――富の人的源泉ではあるがこの富を自分のために実現するあらゆる手段を失っている姿で――出てくる。彼がこの過程に入る前に、彼自身の労働は彼自身から疎外され、資本家のものとされ、資本に合体されているのだから、その労働はこの過程のなかでたえず他人の生産物に対象化されるのである」。（"K" I, S.595―596, 訳、P.743）。みられるようにここでは、「労働疎外」は労働者の労働が彼のものではなくなって資本の一要素になるという意味でもちいられている。『資本論』の諸草稿のばあいには、それはもう少し広い意味で――たとえば右の引用文でいわれている諸過程全体を包括する意味で――もちいられているといえよう。

『資本論』でこの概念が使用されていないのはなぜかという問題は、これまでの考察ですでに明らかである。『資本論』で論証されているように、生産の二大要因――生産手段と労働――の疎外された形態は資本と賃労働であり、この二大形態こそ、資本制的生産関係という同じ関係の両極的表現であって、資本主義社会を決定的に特徴づけるものである。したがって『資本論』では、初期「労働疎外」論にみられたように、「私的所有」と「疎外された労働」という「二つの要因」から「経済学上のすべての範疇を展開する」のではなくて、右の「二つの要因」を資本、賃労働という概念としてとらえ、このブルジョア社会の本質的生産関係を発生的に分析し展開しているのである。つまり、

資本制的生産関係の発展法則を、その最も簡単で基礎的な範疇からより複雑で発展した範疇にいたる必然的関連において論証しているのである。

とはいえ、「労働疎外」とか「疎外された労働」という概念がこうした理由で使用されていないという事実は、これらの概念が資本、賃労働を究明するさいに不適切で間違ったものだということを意味しない。しかも、これらの概念によって明らかにされた人間労働の転倒したありかたに関する把握自身は、『資本論』において放棄されているどころかより深化され、詳細に展開されているといわねばならない(15)(この点は、本拙論第二章で詳しく考察したとおりである)。

(15) この点に関して、つぎのような見解がある。「疎外された労働」概念は「多義的」である、つまりこの概念は、「労働者の労働の他者化は労働の物化一般として労働者の労働の生産物が労働者と対立する、という意味にとれるし、またこの労働生産物が交換によって他人に譲渡される、という意味にとれるし、さらに労働力の売買そのものの意味にも、労働力が売買されて労働者の労働が資本家の強制する労働として行なわれる、という意味にもとれ、剰余価値が蓄積されて不払労働がより多くの労働を支配する、という意味にもとれる」。したがってこの概念は、「マルクス経済学の範疇として解体せざるをえず、彼の経済学の思想的基礎をなす概念にとどまった……」(岡田裕之、「社会主義的生産における疎外された労働」〈『経営志林』第六巻第一・二号、P.64所載〉)。経済学批判の体系をつくり上げるうえで、『疎外された労働』の概念というものが不十分であるのみならずまちがいになる」(同氏の同じ論題による学会報告へ『経済理論学会報第七集』、P.70.所載〉)。

ここで岡田氏は、「疎外された労働」の概念は解体したがそこにふくまれていた内容は思想として残ったのだという主旨の主張をされている。

この主張は、内容的にみれば、「疎外された労働」概念を軸にして(事実上)とらえられていた労働主体の地位と運命に関する把握が『資本論』で、堅持されていることを主張するものともとらえうる。もしそうであれば、この主張はその限りで正しい。しかし、さきの文章で、「疎外された労働」概念は「多義的」でこれを使用するのは「不十分であるのみならずまちがい

になる」から「解体した」といわれている点は誤っている。この概念のとらえかたが初期には「多義的」で「不十分」だったとしても、それは労働の転倒したありかたとその止揚に関する把握自身が未熟だったことの反映であって、現に『資本論』の諸草稿では、より科学的に高められた右の把握をふまえて、この概念が使用されているのである。氏の主張にしたがうと、『剰余価値学説史』や『直接的生産過程の諸結果』や『要綱』でこれらの概念が用いられているのは「不十分であるのみならずまちがい」だということにならざるをえない。たしかに『資本論』ではこれらの概念はほとんど用いられてはいない。しかし、「疎外された労働」を賃労働ととらえ、労働の転倒した諸関連を「労働疎外」ととらえる考えが誤りで放棄されたのではない。ただ、これらの関連なり過程を科学的に詳細に分析したあとで、そうした関連や過程を「労働疎外」の過程だとのべたり、あるいは賃労働の諸特質を明らかにしたあとで賃労働を「疎外された労働」だと改めていわないだけのことである。このばあいには、この概念で表示される内的関連がどのように正しく把握されているのかが重要なのであって、この概念を使用するかどうかは二義的問題になっているのである。これをとりちがえてことばを言葉自体の問題に解消し、この概念が多義的だからこれを使うのはまちがいだというのであれば、「価値」概念も多義的だからこれを経済学で用いるのは誤りだということになりかねないであろう。

## (六)

〔六〕、『ドイツ・イデオロギー』、『哲学の貧困』、『賃労働と資本』、『共産党宣言』等は、初期「労働疎外」論から『資本論』にいたる理論的進化をその前半過程において如実に明示する労作であり、以上の結論を確証するうえで有力な素材をなすものである。そこで、これらの諸労作において当面の観点から注目すべき若干の点をひろいだしておくことにしよう。

これらの労作に示される経済学研究の歩みについては、まず、つぎのマルクス自身の簡単な記述をみるにしくはない。

「私は、フリードリッヒ・エンゲルスとは、経済学的諸範疇の批判のための彼の天才的な概説が（『独仏年誌』に）現われて以来、たえず手紙をとりかわしつづけてきたが、彼は別の道筋をへて（彼の『イギリスにおける労働者階級の状態』を参照）、私と同じ結果に達していた。そして一八四五年の春、彼もまたブリュッセルに腰をおちつけたときに、われわれは、ドイツ哲学のイデオロギー的見解にたいするわれわれの以前の哲学的意義を清算することを決意した。この企てはヘーゲル以後の哲学の批判というかたちで実行された。……当時われわれがあれこれの方面でわれわれの見解を世間に問うたばらばらの仕事のうちからは、私はエンゲルスと私が共同で執筆した『共産党宣言』と、私が公表した自由貿易論とだけをあげるにとどめる。われわれの見解の決定的な諸点は、一八四七年に刊行されたプルードンに反対した私の著書『哲学の貧困』のなかで、たんに論争のかたちでではあったが、はじめて科学的に示された。『賃労働』についてドイツ語で書かれた一論文は、私がこの題目についてブリュッセルのドイツ人労働者協会でおこなった講演をまとめたものである（『経済学批判』《序言》、M. E. Werke, 13, S.10, 訳、P.7—8）。

× × × ×

『ドイツ・イデオロギー』（一八四五年—四六年）について。この労作は、史的唯物論（マルクスが『経済学批判』の序言で「研究にとって導きの糸として役立った一般的結論」と呼んだもの）が、その基本においてはじめて確立された労作である。ここで史的唯物論が確立されることによってはじめて、経済的社会構成体の発生、発展、消滅の過程を——さらにまた、「労働疎外」の歴史的傾向を——全面的に科学的に分析することが可能になったのである。

ちなみに、ほぼ一年前の『経・哲草稿』では、生産力とか生産関係という概念は未完成のままで「労働の疎外」が論及されていたが、ここでは、たとえば、生産力と「交通形態」（Verkehrsform, 事実上で生産関係を表わす）の矛盾に

よって個々人や社会の発展が規定されること、これらの要因が人々から疎遠な力として自立化すること、が明示されている。[16] またここでは、地代や利潤等の経済学的範疇は一定の生産段階に照応する社会的諸関係であること、[17]「人間的、非人間的」という表現は、一定の生産段階に応ずる特定の支配的な諸関係に照応して使用されるべきであること、等々という説明が行なわれている。[18] そして、「疎外された労働」という概念は姿をかくし、「疎外」概念も、分業によって条件づけられる種々の個人の協働によって生ずる生産力が、これら諸個人には、その協働そのものが自然成長的であるため、かれら自身の結合された力としてあらわれず、むしろなにか疎遠な、かれの外に立つ強制力としてあらわれることを、「哲学者たちにわかる言い方をつづけるならば」というかたちで用いられている。[19]

ところで、史的唯物論の確立によって、「労働疎外」に関する科学的研究の指針が獲得されたとすれば、この史的唯物論はまた、ほぼ一年前の『経・哲草稿』（ないし「労働疎外」論）を「母胎」にして形成されえたのである。（拙稿第一章参照）。

(16) M.E. Werke 3, S72—75（訳、P.68—71）。
(17) Ibid, S.212（訳、P.230—231）。
(18) Ibid, S.417—418（訳、P.467—468）。
(19) Ibid, S.34（訳、P.30,『新版』、P.70）。

## (七)

『哲学の貧困』（一八四六—四七年）、『賃労働と資本』（一八四七年）。

前述したように、前者は獲得された史的唯物論に基づく最初の経済学の著作であり、マルクス、エンゲルスの「見

解の決定的な点」を「はじめて科学的に」示したものである。後者は、前者につづいて表記の基本的発展関係を概括したものといってよい。

これら二つの労作でまず注目させられる点は、二、三年前の『経・哲草稿』当時とくらべて、「労働疎外」にかかわる把握が格段の発展をとげている点である。かつて「私的所有」と「疎外された労働」の関連としてとらえられていた関連が、ここでは、資本、賃労働関係としてとらえられ、その発展傾向が、ブルジョア体制における生産力と生産関係との矛盾の発展という見地からとらえられている。

たとえば、両著作におけるつぎの叙述には、はやくも『資本論』に近い把握が示されているといえよう。まず、『哲学の貧困』の叙述から示すことにする。

「だから日ましに、つぎのことが明らかになっていく、すなわち、ブルジョアジーがそのなかで行動する生産諸関係は単一の性格、単純な性格をもつものではなくて二重の性格をもつものであるということ、富がそのなかで生産されるその同じ諸関係のなかで、貧困もまた生産されるということ、生産諸力の発展がそのなかに存在するその同じ諸関係のなかに、抑圧を生みだす力が存在するということ……」(M.E.Werke, 4, S.141)。「経済学者がブルジョア階級の科学的代表者であると同様に、社会主義者と共産主義者とはプロレタリア階級の理論家である。プロレタリアートがまだ自己を階級として構成するほどまでに成長していないかぎり、したがってプロレタリアートとブルジョアジーとの闘争そのものがまだ政治的性格をおびないかぎり、そしてまた、生産諸力がまだプロレタリアートの解放と新しい社会の形成とに必要不可欠な物質的諸条件を予見させるほどまでにブルジョアジーそれ自身の胎内に発達していないかぎり、これらの理論家たちは、被抑圧階級の欲求にそなえてそれにこたえるため、もろもろの体系を一時のま

にあわせにつくり、社会を再生させる科学を追求する空想家であるにすぎない。しかし、歴史が前進し、それとともにプロレタリアートの闘争がより鮮明な輪郭を示すにつれて、彼らが彼ら自身の頭で科学を探究することはもはや必要でなくなる。彼らは彼らの目のまえで起ることを了解し、その器官となりさえすればよいのである。……彼らが闘争の端緒にあるかぎり、彼らは貧困のなかに貧困だけをみて、そのなかに、やがて旧社会をくつがえす革命的破壊的側面をみないのである」（Ibid, S.143, その他、S.180—181も参照）。

つぎは、『賃労働と資本』からの叙述である。「資本が急速に増大すれば、賃銀も上がるかもしれないが、資本の利潤のほうがくらべものにならないほど速く上がる。労働者の物質的状態は改善されたが、それは彼の社会的地位を犠牲にしてである。彼らと資本家をへだてる社会的溝は、ひろがったのだ。最後に、賃労働にとってもっとも有利な条件は生産的資本ができるだけ急速に増大することだというのは、つぎのことを意味するにすぎない。すなわち、労働者階級が、自分たちに敵対する力、自分たちを支配する他人の富を、急速にふやし大きくすればするほど、労働者階級はそれだけ有利な条件のもとで、新しくブルジョア的富をふやし、資本の力を大きくするために、働かせてもらえる、ただし、ブルジョアジーが自分たちをつないで引きまわす金の鎖をみずからあまんじてきたえながら、ということだ」（M. E. Werke, 6, S.416）。他方では、「生産方法、生産手段はこのようにたえず変革され、革命されて分業は一段とすすんだ分業を、機械の使用は一段と進んだ機械の使用を、大規模作業は一段と進んだ大規模作業を、必然的によびおこすのである」（Ibid, S.418）。「最後に、資本家が前述のような運動に強制されて、既存の巨大な生産手段をさらに大規模に利用し、この目的のために信用のあらゆる発条（ばね）を動かすのにつれ、それに比例して、あの地震も増加する」（Ibid, S.422—423）。

『哲学の貧困』についてとくに注目すべき点は、経済的諸範疇が物質的生産の一定の発展段階に照応する「生産関係の理論的表現」であるから、その内容をつかむには生産諸関係の歴史的運動を究明せねばならぬ、という立場が鮮明に示されている点、[20] さらにこの立場から、「社会の歴史のなかに、生産物を交換する様式がそれらの生産物を生産する様式に基づいて規定される……。私的交換もまた一定の生産様式に照応している」(Ibid, S.105) こと、貨幣とは、一つの物ではなくて一つの生産関係である (Ibid, S.107) ことが明示され、それらの歴史的研究が深められている点である。

(20) Ibid. S.126, S.130, 訳, P.129, P.133—134,

なお、以前の「労働疎外」論では、直接的にはそれほど積極的に評価されていなかったリカードの労働価値論が、「現存の経済生活の科学的解説」(Ibid S.81) として評価される一方、「賃銀は、いいかえれば、労働の相対的価値または価格は、労働者の生活維持に必要なあらゆるものの生産に要する労働時間によって、決定される」こと (Ibid, S.82)、「労働の価値によって商品の相対的価値〔生活諸手段の価値——ドイツ語版〕を決定することは……悪循環のなかをぐるぐる回ること」だという指摘が行なわれている点も看過しえぬところである (Ibid, S.86)。ちなみにこうした指摘は、剰余価値生産を解明するうえでの決定的前提の一つが解決されていることを意味しているからである。

『賃労働と資本』では、賃労働の歴史的性格が農奴や奴隷の労働との対比でとらえられると同時に、はやくも剰余価値生産の核心的把握が提示されていることも注目させられる点である。

「資本の本質は……生きている労働が、蓄積された労働のために、それの交換価値を維持し、ふやす手段として役

立つ、という点にある。……労働者は、彼の労働と交換に生活資料をうけとるが、資本家は彼の生活資料と交換に労働を、労働者の生産的活動を、創造力をうけとる。そして労働者は、この力によって、彼の消費するものを補塡するだけでなく、蓄積された労働に対して、それがまえにもっていたよりも大きな価値を与えるのである」(Ibid, S.409)。

『共産党宣言』（一八四七年―四八年）。ここでは、資本制的生産様式の歴史的傾向が正確に要約され、それに基づいてプロレタリアートの世界史的地位＝使命が明示されている。既述の理論的前進が、ここに科学的社会主義の宣言として結実されているのである。[21] その内容は周知のところであるから、ここでくりかえすまでもあるまい。

(21) ちなみにエンゲルスは、『宣言』の一八七二年ドイツ語版への序文において、「この二五年間に事情がどんなに大きく変化したにしても、この『宣言』のなかにのべられている一般的な諸原則は、だいたいにおいて今日でも完全に正しい」とのべている (M.E.Werke, 4, S.573, 訳、P.590)。

以上に概観したところが、経済学研究のいわば前期をなしているのであるが、その進歩にはまことに目をみはらされるものがある。とはいえ、なお研究し、発展させられるべき点も多い。とりわけ、労働の二面的性質の発見や労働力と労働との区分の発見は重要である。現存する「遺稿」でみうる限りでは、この二点はともに『経済学批判要綱』で果されているのであって、そこでは『資本論』で展開されているほとんどの諸点が扱われているのである。

## あとがき

「労働疎外」論についてはおびただしい研究があるが、経済学的な考察はわりあい少ない。しかも、『資本論』とその諸草稿に即した綿密な研究は皆無に近いといってよい。また、初期「労働疎外」論と『資本論』との関連につい

ても、たとえば前者が後者の剰余価値論、蓄積論へ発展させられているという指摘はみられても、この観点からその豊富な内容を正しく把握する作業はほとんどみられない。他方、いわゆる「物化論」とか「物神性論」とかに発展させられているという見解についても、「労働疎外」と「物神性」との関連を『資本論』やその草稿にもとづいて正確に把握しているとはいいがたい。さらに、「労働疎外」は、労働者階級の「窮乏化問題」との関連においても論議されているが、双方の内的関連についてもまた、十分につっこんだ考察がなされていない実状にある。

本稿は、こうした空白、ないし不十分さを多少でも補なうことを期待してかかれた。当初、三回程度のものを予定していたが、その倍になってしまった。ふりかえってみると、いっそう深めたい点やもっと整理し簡潔にしてよい部分が目につく。いずれ機会でもあれば果すことにしたい。

経済的諸範疇の関係を論理的に首尾一貫して追求してゆくばあい、その背後にひそむ人間的労働の社会的関連とその発展法則という観点はつねにこれを堅持していなくてはならず、とりわけ、資本主義を揚棄し、社会主義を建設する主体（プロレタリアート）のありかたと任務を明らかにするという観点、主体的立場が堅持されねばならない。こうした観点や立場を欠落させるところに、「学問至上主義」的傾向や、いわゆる「宇野学派」にみられるマルクス経済学の俗流化（魂のぬきとり、ブルジョア化）が生ずるのである。「労働疎外」の問題は、こうした点を浮彫りにする上で最適であろう。本稿もとくにこの点に留意したつもりである。

一九七二年十月十五日